

## 海そして海外の地へ-IV

### バンクーバー・シアトル・ポナペ・ホノルルへ一人旅

*It is IV to the Sea Oversea Ground I Travel alone to  
VancouverCANADA, SeattleUSA and HonoluluHAWAII*

岩崎行伸

特別研究休暇の目的は、1) カナダ・バンクーバーにおけるビンナガマグロ分布の北限確認。2) ミクロネシア諸島ポナペにおけるマグロ漁業基地の現状。3) ハワイ・マウイ・ホノルルにおけるマグロ資源研究の現状とハワイ大臨海実験場の留学・研修。4) 海そして海外の一人旅等々である。

1) カナダ/バンクーバー：T大学の特別研究休暇費を受けて、約5ヶ月の究・調査一人旅である。9/26日(1991)、JR草薙駅-静岡-ひかり特で東京・成田国際空港へ、15時発-カナダ・バンクーバー国際空港に10時45分に到着。トロリング漁船によるビンナガマグロの水揚げと刺身ギン鮭の遡上見学/往復300kmの旅(Mr. Y. Gomyo)。

水族館によるシャチとイルカの飼育と調教の見学といずれも感嘆の連続であった。BCコロンビア大における海洋生物学研究室での研修、アメリカ/シアトル行きでは、魚の博覧会に参加し漁業機器・水産加工機器類の出品と実演には省力化機器に驚いた。大リーグ・メジャー・シアトルマリナーズの観戦やイチロ-shuzuki氏とお会い出来なかったが、時折、奥さんとお揃いで、新鮮な魚・肉類を求めてパブリックマーケットに出かけるというので、若しかしてと思い見学する。

2) ミクロネシア諸島/ポナペ：聞き込み調査の間を見て遺跡見学する。沖繩船団のマグロ漁船(100トン)、船長・機関長・現地人2名計4名の延縄漁は5~6日間にかけて漁獲しキハダマグロの水揚げと日本国内への空輸送が行われていた。青年協力隊と海水研OBの現地再会によりスピードボート(20ドル・4000円)による海からとレンタルタクシー(25ドル・5000円)による石造り遺跡と島一周りし、日本軍による道路の歴史に関心した。

3) ハワイ/マウイ：12時間のフライトで12月1日00時ホノルル国際空港に着く。早朝、リムジンで予約のT大学研修センターに到着するが、早朝と英語のため、受付に大いに苦慮した。

12月8日は二次大戦の50年メモリーの式典がパールハーバーで行なわれていた。

海そして海外の記憶-IV

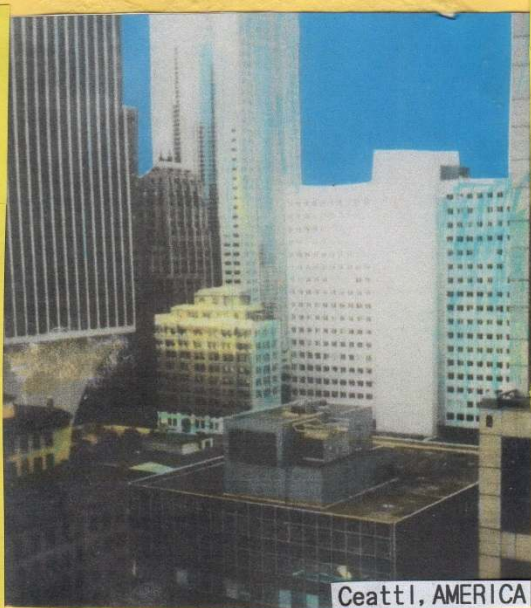
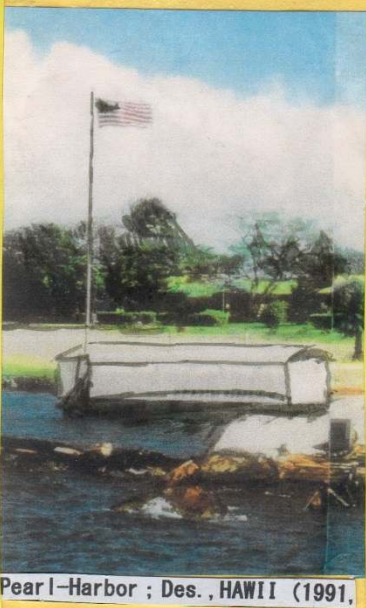


図1. 海そして海外の地へ-IV (バンクーバー・パールハーバー・シアトル・ポナペ  
米国海空陸軍人OB500人ほど、日本人としての参加者は3~4名の参列であり、肩身  
の狭い気分であるが行きずりの合掌を行った後、真珠湾に浮かぶ記念会館を小型船で見学。

中には日本のゼロ戦や特殊潜航艇が淋しく展示されていた。

また、同日、恒例のホノルル・フルマラソンが行われており、ワイキキ広場に観衆 2000 人と多くの日本人が特別参加していた。

ハワイ大や、その臨海実験場では、サメ類やテラピアの水槽における飼育研究・研修を受ける。米国の水産研究所において、Dr により、カツオ・マグロ類・カジキ類のハワイにおける漁獲状況や資源的現状について説明を受けた。その後 2 週間にわたり、短期研修として海洋生物、特にサメ・キハダマグロの行動生態学的結果について講義・演習等を受けた。年末カウントダウンの日は、日本では年越そばを食べることが習慣であるが、ハワイでは中国系人による爆竹音が年明けまで響いて、年頭を祝っていた。小生の正月は、白木屋食堂で一人淋しく一杯と雑煮で年明けを祝った。

年始には、ダイヤモンドヘッド（岩山/海拔 300 m）の裏側から登って、新年の日の出を仰いだ。日本と異なり、数人のみであった。頂上には大戦のトーチカと砲台跡が今尚残されていた。ここからの眺望は格別で、ホノルル・ワイキキ市街と太平洋上を一望できた。カツオ・マグロのトロリング船・メカジキ獲りはワンマンはえ縄船の見学と、フィッシャーマンズでは日本人向けランチとしてコーヒーとマヒマヒのフライランチ 25 ドル、日本魚名シイラ白身雑魚であるが、ハワイでは高級魚を食べた。マウイ島一周 1 ドルバスの旅はマウイ島をよく理解できた。

総じて、この海外調査研究研修の一人旅は、会話には少々不自由したが、研究成果による別刷を頂き、後日辞書等で解決した。また海外生活面に関しては、必要最低の程度で通じたこと、若干の自信を得たといえるが、体重は当初 60 kg が 55 kg に低下していた。次回は何時の日にも 1 ヶ年で世界一周への一人旅を計画中である。

追伸：本稿の執筆を進めている時、Tokai Uni. 海水研 OB&OG から、緊急 FAX が入り、未だ若いのに何故そんなに急ぐのかと驚嘆した（2013.09.23）

。故・川合雄次氏（海水研 OB）は、To. 大学海洋水産卒後、海外青年協力水産隊員としてフィリピンに漁業指導隊員として派遣されている。ミンダナオ島現地においては、安定的漁業として浮魚礁を考案試作し計画的漁獲成績を揚げている。現地等では、この魚礁筏を KAWAI-I 号と呼ばれる程の人気ぶりであったという。外地から帰国後、日本のカツオ・マグロ漁協組でのご活躍中とのことである。

何時の日か？、KAWAI-II 号に乗り日本に再々帰国されること、安らかにと独り言・・・、合掌・・・、・・・、・・・。

添付資料

図 1. 海そして海外の地へ記憶-IV（バンクーバー・シアトル・ポナペ・ホノルル）

\*私が歩いてきた道-IV、T 大学特別研究休暇制度（海外マグロ漁業基地の現状）